

「プレーパーク」という遊び場

3年ほど前に、NHKの番組ドキュメント 72 時間「どろんこパーク 雨を走る子どもたち」をみて衝撃を受けました。神奈川県川崎市子ども夢パークの3日間を記録したドキュメンタリーです。「そこにはありのままの子ども達がいた。このプレーパークには、他の公園には見られない特徴がある。ここは自由に決まりがなく、こどものやりたい事が尊重され、禁止事項がほとんどない。」というナレーションから始まります。画面には、雨の中、広場で思いっきり遊ぶ子どもたちの姿が映っていました。土を掘り起こし土の上を転がり全身どろまみれで遊んでいる子ども、雨の中をウォータースライダーとよばれる滑り台から池に豪快に滑り落ちてくる小学生たち、雨上がりに木に登って枝を揺らし雫を降らせて楽しむ子どもなど、とても自由な遊び方をしています。他にも、ピロティで木片を使って何かを黙々と作っている子や、地面に座り込んで蟻の巣を眺めている小さい子もいて、それぞれのペースでやりたい事をやっているようでした。こんなに自由に遊べる場所があることに驚きました。

ちょうどその頃、私は小学生の娘の同級生やそのお母さんたちと、公園や小学校の運動場などで外遊びやイベントを子どもたちと一緒に企画をする「遊びの会」をしていました。あるお母さんと学校の問題について話あう中で、子どもに意見を聞くと大抵楽しい事がしたい、遊びたいという話になるので、それならみんなで集まって遊ぼうとはじめました。小さなコミュニティで集まって遊んでいる私たちと、このドキュメンタリーの内容は別の世界のこのように感じていたのですが、その後、子どもにとって遊ぶ事がどういう事なのかを考えたり、プレーパークに思いを馳せるようになっていったのは、この活動がきっかけになっています。

そもそも「プレーパーク」とは何でしょうか。特定非営利活動法人日本冒険遊び場づくり協会では、プレーパークを「すべての子どもが自由に遊ぶことを保障する場所であり、子どもは遊ぶことで自ら育つという認識のもと、子どもと地域と共につくり続けていく、屋外の遊び場である。」と定義しています。

40年ほど前に「プレーパーク」とよばれる遊び場をつくる活動が始まり、全国に草の根的にその活動は広がっていきました。川崎市子ども夢パークもプレーパーク（冒険遊び場ともいう）の一つです。

ただ遊び場を大人がつくり与えるのではなく、子どもが主体的に遊ぶ事ができるようにすることを第一に考え、子どもが思う存分好きなことができるように大人（プレーリーダー）が環境を整えたり、危険になりすぎないように見守ったりしながら、子どもが「遊び」をつくることができるようにするのが、普通の遊び場と違うところです。変化してく遊び場ともいわれています。私たちの子どものころは勝手にそのような場所を見つけて空き地や公園で遊んでいたような気がしますが、都市化するまちや地域とのつながりが薄くなりがちな社会では自然にそういう環境をみつけだすことが難しくなっているのかもしれない。

川崎市子ども夢パーク内には、屋内で遊べる施設が併設されています。本をよんだりゲームできる部屋や乳児がゆっくり過ごせる部屋、学校の中に居場所を見出せない子どもや若者たちの居場所もあります。遊び場としてだけでなく、子どもの居場所として様々な使われ方をしています。このような場所が、他の地域にも広がっていくことを願っています。

私の住む地域でもプレーパークをつくりたいと活動をはじめている人達がいます。私もその仲間に入って一緒に考えていきたいと思っています。

南 知香子



敷地内の「大人のみなさんへ」の看板。(子ども夢パークのInstagramより)